

## Book Review

木村直樹

### 『〈通訳〉たちの幕末維新』

吉川弘文館 2012, p. 203

ISBN978-4-642-08072-9

評者 長沼美香子



1853（嘉永6）年、浦賀沖に来航したペリー提督率いる異国船を前にして、オランダ通詞の堀達之助が「I can speak Dutch.」と流暢な英語で応じたという逸話は、よく知られている。堀が「自分はオランダ語が話せる」と英語で話したという象徴的な出来事は、大きく変わろうとしていた時代と不可分の関係にある。

本書では、幕末維新という「激動の時代を語学力で生き抜く」通詞たちの群像が描かれている。そして、異文化接触や異文化コミュニケーションのあり方やその変化が、当時活躍した言語の専門家としての通詞たちに焦点をあわせて考察される。本書では主としてオランダ通詞が取りあげられているが、蘭学から英学へと舵が切られた時代に、オランダ語の専門家集団はいかなる苦戦を経て新しい言語と文化に立ち向かったのであろうか。

興味深いことに、著名なオランダ通詞である、森山多吉郎<sup>もりやまたきちろう</sup>、名村五八郎<sup>なむらごはちろう</sup>、堀達之助<sup>ほりたつのすけ</sup>、西吉十郎<sup>にしきちじゅうじょう</sup>は明治元年正月を次のような場所において様々な役職で迎えていたという。

森山多吉郎	兵庫奉行支配組頭 <sup>くみがしら</sup> として兵庫
西吉十郎	外国奉行支配組頭として大坂
名村五八郎	勘定格通弁御用頭取 <sup>かんじょうかくつうべんごようとうどり</sup> として江戸
堀達之助	開成所教授 <sup>かいせいじょ</sup> として箱館 <sup>はこだて</sup> へ派遣中

さらに明治以降、「森山は一市民として明治四年に横浜で生涯を終え、西は大審院院長（現在の最高裁判所長官）になり明治二十四年没、名村は工部省や開拓使へ出仕し明治九年没、堀は開拓使へ出仕したのち大阪で明治二十七年に没している」（5頁）というのだ。幕府直轄都市の長崎に生活基盤のあったオランダ通詞たちが、どのような事情から列島各地で新しい明治政府とかかわっていったのか。この問題を考えることは、日本近代史を通詞の視点から辿り直すことになる。

そもそも「通詞」とは何なのか、という問いに対しては、本書ではこう定義されている。

通詞とは、文字通り「詞<sup>ことば</sup>を通じる」ために必要な人びとである。だが、彼らは決して、「通訳」ではなかった。確かに、通訳という仕事もしたが、彼らはある時は翻訳者であり、ある時は商人であり、ある時は学者でもあるという多彩な側面を有していた。今日のプロの通訳と比べると、扱う範囲が大きかったと言える。(2頁)

このように江戸時代の通詞たちは、現在の一般的な通訳者というイメージに回収できない側面をもつ。さらに、長崎で活躍したオランダ通詞や唐通事以外にも、対馬では朝鮮語、薩摩では琉球語、松前や蝦夷地ではアイヌ語との間の仲介者が必要であったことを思えば、幕末維新におけるコミュニケーションの専門家たちの多岐にわたる役割が想像できる。

江戸期の翻訳史や通詞に関する学術研究と言えば、杉本つとむの一連の著作群などが思い浮かぶかもしれない。とりわけ杉本の『長崎通詞ものがたりーことばと文化の翻訳者』(創拓社、1990)は、一般書として楽しく読める。また歴史小説の分野では、吉村昭の『海の祭礼』(文藝春秋、1986)や『黒船』(中央公論社、1991)などが、日本が開国へと歩を進める風景のなかで、通詞の活躍を生き生きと描写している。これらと本書を読み比べてみるのも一考であろう。

著者の木村直樹氏は現在、東京大学史料編纂所の助教であり、近世の日本史研究を専門とする。歴史家としての視点が、〈通訳〉という対象を斬新な角度で切り取る。本書は歴史研究と通訳研究を架橋する一冊である。ただ惜しむらくは、キーワードである〈通訳〉という言葉への配慮が中途半端なところが散見する。おそらく書名は、『〈通訳者〉たちの幕末維新』とした方が適切ではなかったのか。

先に引用した「通詞」の定義にも示されているように、通訳・翻訳だけでなく、多種多様な実務を担当した職能集団は、素朴に〈通訳者〉という範疇に収斂できる人びとではない。だが、最新の *Interpreting Studies* の成果、例えば、ポエヒハッカー『通訳学入門』(みすず書房、2008)への接合の可能性を考えると、本書での視点、つまり異文化接触の最前線で活躍した人びとへのまなざしが魅力的であるだけに、本書全体を通して「通訳(行為)」(*interpreting*)と「通訳者」(*interpreter*)というターミノロジーの峻別に目配りが行き届いていないのは残念だ。この点も含めて、通訳学の立場から、「通詞」関連のテーマはさらに深化させられるはずである。

.....  
【評者紹介】

長沼美香子 (NAGANUMA Mikako) 元立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。日本通訳翻訳学会理事。  
.....